

A New Perspective on the Paradox of Poverty and Donation : A Sense of Money Scarcity Promotes the Tendency of Attributing Others' Difficulties to a Lack of Money

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹部, 成崇 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6950

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



**貧しさと寄付のパラドクスに対する新たな視点
- 金銭的欠乏感が他者の苦境を
金銭の少なさに帰属させる傾向を強める -**

**A New Perspective on the Paradox of Poverty
and Donation: A Sense of Money Scarcity Promotes
the Tendency of Attributing Others' Difficulties
to a Lack of Money**

竹部成崇

要約

社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人よりも寄付をすることが示されている。近年の心理学研究は、この直感に反する現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆している。すなわち、貧しさに伴う主観的社会経済的地位の低さが、苦境にいる他者に対する利他的動機づけを高めやすくすることが示されている。しかし、合理的な観点から考えれば、利他的動機づけが高まったとしても、貧しい人は金銭的援助でなく、その他の援助（e.g., 時間的援助としてのボランティア）を行うべきであろう。なぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのであろうか。この謎を解明するため、本研究では、主観的社会経済的地位の低さとは似て非なる貧しさの側面、すなわち「金銭的欠乏感」に着目し、これが他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討した。2つの実験の結果は、金銭的欠乏感が高まると、人は他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすくなることを示していた。本研究の知見が「貧しい人ほど寄付をする」という現象のメカニズムの解明に貢献する可能性とともに、限界点および今後の展望について議論した。

キーワード：欠乏，原因帰属，お金，投影，寄付

はじめに

貧しい人と豊かな人では、どちらの方が他者にお金を分け与えるであろうか。直感的には、お金を多く持っている豊かな人の方が、他者にお金を分け与えるように思われる。しかし、社会調査ではしばしば、貧しい人の方が豊かな人より寄付をすることが示されている (e.g., Greeve, 2009; Johnston, 2005)。なぜ、このような直感に反する現象が生じるのであろうか。

これまでの研究は、この現象に、宗教性・年齢・寄付額の相場が関連していることを示唆してきた (e.g., Iannaccone, 1988; James III & Sharpe, 2007; Wiepking, 2007)。しかし、貧しい人の方が寄付をする傾向は、宗教関連でない寄付においても認められ (e.g., James III & Sharpe, 2007)、年齢の効果を統制しても確認された (e.g., Wiepking, 2007)。また、寄付額に相場があるとすると、お金がなく生活が苦しければ、相場より少ない金額を寄付する、あるいは、寄付をしないという選択をすることが自然であろう。そのため、宗教性・年齢・寄付額の相場という観点では、この逆説的現象を十分に説明できない。

近年の心理学研究は、この現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆している。具体的には、貧しい人は主観的社会経済的地位が低く、慢性的に外的な力を知覚しているため、他者に注意を払いやすく、結果として、苦境にいる他者に対する利他的動機づけが高まりやすいことが示されている (for reviews, Kraus, Piff, & Keltner, 2011; Kraus, Piff, Mendoza-Denton, Rheinschmidt, & Keltner, 2012)。それゆえ、貧しい人の方が他者を援助することは十分に予測できる。この際、合理的な観点から考えれば、金銭的援助でなく、その他の援助 (e.g., 時間的援助としてのボランティア) を行うべきであろう。しかし、彼らは寄付以外の社会的援助 (e.g., ボランティア, 献血) はあまり行わない (e.g., Independent Sector, 2002; Putnam, 2001)。そのため、主観的社会経済的地位の低さに伴う利他性の高さでは、この逆説的現象を十分に説明できない。

ではなぜ、貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのであろうか。この謎を解明するため、本研究では、主観的社会経済的地位の低さとは似て非なる貧しさの側面である「金銭的欠乏感」に着目する。

欠乏感とは

欠乏とは、自分の持っている量が必要と感じる量より少ないことである (Mullainathan & Shafir, 2013)。例えば、ある研究者が研究のために実験機器を購入したり、実験者を雇ったりしたいと思ったものの、研究費の少なさが原因でそれらができないとき、その研究者は金銭的な欠乏を感じると考えられる。欠乏はお金以外の様々な資源についても生じうる。例えば、書かなければならない論文があるものの、授業の準備や家庭の用事など、他にもしなければならないことが多くあり、必要な時間を確保できないとき、その人は時間的な欠乏を感じると考えられる。また、人には他者と繋がりたいという基本的な欲求があるため (e.g., Baumeister & Leary, 1995)、他者から除け者にされ続けたり、他者との交流を何週間も絶たれたりした場合、その人は他者との繋がりの欠乏を感じると考えられる。このように、当人の生活にとって重要な何らかの資源について、保有量が必要量を下回っているとき、その人は欠乏を感じるのである。

主観的社会経済的地位の低さと金銭的欠乏感は、ともに貧しさに伴う感覚である。貧しい人は収入や学歴や職業的地位が低いために、自身の社会経済的地位が低いと感じるだろう。また、貧しい人は収入や資産が少ないために、生活に必要なお金が不足していると感じることも多いだろう。しかし、両者は同じものではない。主観的社会経済的地位の低さは、他者との比較を通じて感じられるものであり、その本質は「順位の低さ」である (Kraus, Tan, & Tannenbaum, 2013)。他方、金銭的欠乏感は、自身の持っているお金の量と必要と感じるお金の量の比較を通じて感じられるものであり、その本質は「資源の不足」である (Mullainathan & Shafir, 2013)。つまり、両者はともに貧しさに伴う感覚であるものの、個人間と個人内のどちらの比較を通じて生じるものであるのか、その本質は「順位の低さ」であるのか「資源の不足」であるのか、という違いがある。このように、両者は似て非なる概念なのである。

欠乏感が人の心に及ぼす影響

欠乏感に関するこれまでの研究では、欠乏感が高まると、当該欠乏に関わる課題に対する集中力が高まることが示されている (for a review, Mullainathan & Shafir, 2013)。例えば、Shah, Mullainathan, & Shafir (2012)

のある実験では、参加者に、ブルーベリーを元手に球を的に当ててポイント稼ぐゲームを行ってもらった。資源潤沢条件ではブルーベリーをたくさん与えられた一方、資源欠乏条件ではブルーベリーを少ししか与えられなかった。その結果、最終的に獲得したポイント数については、当然のことながら、資源潤沢条件の方が多かった。しかし、資源欠乏条件の方が1回の射撃にかかる時間が長く、結果として、的中率は資源欠乏条件の方が高かった。これは、球を的に当てる元手であるブルーベリーという資源についての欠乏感が、球を的に当てるという課題に対する集中力を高めたことを示している。同様の例として、Ariely & Wertenbroch (2002) が挙げられる。彼らは学部生に3本の小論文の校正を3週間以内に行うよう依頼した。その際、提出の仕方について2つの条件を設定した。具体的には、片方の条件では、毎週1本の校正済み論文を提出しなければならなかった。もう片方の条件では、3週間後に3本まとめて提出することになっていた。すなわち、前者の方が締め切りがきつくなっており、時間的欠乏が常に感じられるようになっていた。実験の結果、締め切りがきつい条件の方が、締め切りに遅れることが少なく、誤字をたくさん見つけていた。これは、小論文の校正のための時間という資源についての欠乏感が、小論文の校正という課題に対する集中力を高めたことを示している。このように、人は欠乏を感じると、当該欠乏が関わる課題に対する集中力を高めるのである。

しかし、欠乏感が及ぼす影響には、こうしたメリットだけでなく、デメリットも存在する。それは、当該欠乏と無関連なことを処理する能力を低下させてしまうことである (for a review, Mullainathan & Shafir, 2013)。例えば、Mani, Mullainathan, Shafir, & Zhao (2013) のある実験では、ショッピングモールで通行人に、論理的推論能力や衝動抑制能力を測定する課題を行ってもらった。その際、課題の前に、所有する自動車が壊れてしまったという仮想的シナリオについて考えてもらった。片方の条件では修理費は300ドルであると伝えられ、もう片方の条件では修理費は3,000ドルであると伝えられた。300ドルという修理費は少額であるため、ショッピングモールに来ている人々全員にとって問題とされない金額である。しかし3,000ドルという修理費は、収入が高い人々にとっては依然として問題とならない一方、収入が低い人々にとっては生活に支障をきたす大きな問題となる。そのため、修理費が3,000ドルと伝えられた条件では、収入が低い人々は金銭的

欠乏を感じると考えられる。実験の結果、修理費が300ドルであると伝えられた条件では、その後に行った課題において収入による成績の差は見られなかった一方、3,000ドルであると伝えられた条件では、収入が低い人々の方が高い人々より成績が悪かった。これは、修理費が3,000ドルであると伝えられた場合に収入が低い人々において喚起した金銭的欠乏感が、それとは無関連であるその後の課題 (i.e., 論理的推論能力や衝動抑制能力を測定する課題) を遂行する能力を低下させたことを示している。このように、欠乏感 は、当該欠乏と無関連なことを処理する能力を低下させてしまうのである。

以上のように、欠乏感は、当該欠乏が関わる課題に対する集中力は高める一方、無関連なことを処理する能力は低下させる。こうした欠乏感の影響は、比喩的に「トンネリング」と呼ばれている。トンネルの中に入ると、中のことはよく見えるようになる一方、トンネルの外のことは見えなくなってしまったためである (Mullainathan & Shafir, 2013)。

それでは、トンネリングはなぜ生じるのであろうか。それは、欠乏が人の心を占拠するためであると考えられる (Mullainathan & Shafir, 2013)。ブルーベリーの量が少ないと、ブルーベリーの不足が心を占拠するため、なんとか少ないブルーベリーで多くのポイントを獲得しようと集中する。同様に、自動車の修理費が3,000ドルであると知ると、(収入が少ない場合は) お金の不足が心を占拠するため、関係のない課題のことは十分な注意を払えず、それを処理する能力が低下する。このように、欠乏を感じると、それが人の心を占拠するため、当該欠乏と関連することに対する集中力は増す一方、無関連なことを処理する能力は低下すると考えられる。

欠乏が人の心を占拠することは、実証的な研究においても示されている。例えば Keys, Brozek, Henschel, Mickelson, & Taylor (1950) は、参加者に極度の食事制限をさせた。すると、彼らは料理本に熱中するようになったり、映画を見たとき食べ物シーンに最も興味を示したりするようになった。より近年の研究では、空腹を感じさせた参加者は食べ物に関連する単語 (e.g., CAKE) のみを素早く判断できることや (Radel & Clément-guillot, 2012)、喉の渇きを感じさせた参加者は飲み物に関連する単語 (e.g., WATER) のみを素早く判断できること (Aarts, Dijksterhuis, & Vries, 2001) が示されている。これらの知見は、食べ物や飲み物の欠乏が人の心を占拠することを示している。また、Saugstad & Schioldborg (1966)

は、子どもたちに記憶を頼りに硬貨の大きさを推測させたところ、貧しい子どもは実際よりかなり大きく推測したことを報告している。注意が払われている刺激は現実より強いものとして知覚されやすい (Carrasco, Ling, & Read, 2004) ことを考慮すると、この結果は、貧しい子どもは金銭的欠乏を感じており、お金に関することが心を占拠していることを示唆している。以上のように、欠乏は人の心を占拠するのである。

金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響

欠乏が人の心を占拠し、欠乏している資源のことをよく考えるようにさせたり、それに注意を払うようにさせたりすることを考慮すると、欠乏感は寄付に関連する認知にも影響を及ぼす可能性が考えられる。具体的には、金銭的欠乏感が高まると、他者の苦境の原因も金銭の少なさにあると認知しやすくなることが考えられる。なぜならば、金銭的欠乏感が高まると、お金が足りない状況のことをよく考えたり、そうした状況に対してより注意を払ったりするようになると考えられるためである。その結果として、他者の苦境の原因を推論する際にも、「お金不足」が頭に浮かびやすくなる可能性が考えられる。

この可能性は社会的推論に関する研究からも示唆される。例えば、Van Boven & Loewenstein (2003) のある実験では、大学のエクササイズ施設を利用する人に、山で遭難した3人組についてのシナリオを読ませ、彼らにとって空腹と喉の渇きのどちらがより辛いと思うかを回答してもらった。その際、半分の人にはエクササイズを行う前に回答してもらい、もう半分の人にはエクササイズを行った後に回答してもらった。その結果、エクササイズ後に回答した参加者、すなわち喉が渇いた状態で推論をした参加者の方が、エクササイズ前に回答した参加者、すなわち喉が渇いていない状態で推論をした参加者より、山で遭難した人は喉の渇きにより苦しむと回答した割合が多かった (88% vs. 57%)。同様に、Risen & Critcher (2011) のある実験では、暑さを感じさせた条件の方が、感じさせなかった条件より、地球温暖化がより進行していると推論しやすいことが示された。彼らは別の実験で、喉の渇きを感じさせた条件の方が、感じさせなかった条件より、砂漠化や干ばつが人類に及ぼす影響の程度を高く推論しやすいことも示した。これらの結果は、人は社会的推論を行う際に自己を投影すること、すなわち、自身の内

的状态がそれと一致する方向で社会的推論に影響を及ぼすことを示している。こうした知見からも、金銭的欠乏感が高まると、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすくなることが考えられる。

また、欠乏感は当該欠乏と無関連のことを処理する能力を低下させる (Mani et al., 2013)。このことを考慮すると、金銭的欠乏を感じている人は、他者の苦境の原因について推論するとき、処理能力が低下した状態にあると考えられる。苦境にいる他者は、基本的には、推論者の欠乏とは無関連のことであるためである。このように処理能力が低下した状態で推論するため、金銭的欠乏を感じている人は、他者の苦境の原因について様々な可能性を均等に考えることが困難となり、より自分自身の内的な状態 (ie., 金銭的欠乏感) を基に推論しやすくなる可能性が考えられる。

この可能性は社会的推論に関する研究からも示唆される。例えば、Epley, Keysar, Van Boven, & Gilovich (2004) のある実験では、参加者に、トムとスティーブがジーナから、あるコメディアンショーを見るよう勧められたというシナリオを読んでもらった。シナリオの後半では、その後トムが1人でそのショーを見に行ったことが描写されていた。その際、ポジティブ条件では、トムはそのショーにとっても満足したと記述されていた一方、ネガティブ条件では、とても不満足であったと記述されていた。その後、参加者はトムのスティーブに向けた留守番電話のメッセージを聞いた。メッセージは「ジーナが勧めたコメディアン面白さを、君も自身で確かめてほしい」といった内容であった。これは、ポジティブ条件では「ジーナが勧めたコメディアンは面白かった」と解釈できるものであった一方、ネガティブ条件では「ジーナが勧めたコメディアンは面白くなかった」と解釈できる、つまり、皮肉として解釈できるものであった。しかし、ショーに対するトムの満足度に関する情報がないスティーブにとっては、どちらとも判断できないはずのものであった。最後に参加者は、スティーブがこの留守番電話のメッセージを皮肉と解釈すると思うかどうかを回答した。その際、半数の参加者にはじっくり考える時間が与えられ、もう半数の参加者は3秒以内に回答するよう指示された。分析の結果、じっくり考える時間があつた場合には、自身の知識状態を他者に投影しにくいことが示された。すなわち、ポジティブ条件でもネガティブ条件でも、「スティーブはメッセージを皮肉だと解釈する」と予測する割合はほとんど変わらなかった (45% vs. 50%)。他方、3秒

以内に回答するよう指示された場合には、自身の知識状態を他者に投影しやすいことが示された。すなわち、ポジティブ条件では「ステーキはメッセージを皮肉だと解釈する」と予測をしたのは28%のみであったのに対し、ネガティブ条件では66%もの参加者が「ステーキはメッセージを皮肉だと解釈する」と予測した。また、自身の知識状態に反する予測をした場合（e.g., ポジティブ条件において「ステーキはメッセージを皮肉だと解釈する」と予測した場合）の回答時間は、自身の知識状態と一致する予測をした場合（e.g., ポジティブ条件において「ステーキはメッセージを皮肉ではないと解釈する」と予測した場合）の回答時間よりも長いことが示された。これらの結果は、人はまず自身の状態を基に他者について推論しており、自身と他者の違いを考慮した修正は、初めの推論の後に行われる意識的で時間や努力を要する処理の結果であることを示唆している。この知見と、金銭的欠乏感が当該欠乏とは無関連なことを処理する能力を低下させる（Mani et al., 2013）ことを考え合わせると、金銭的欠乏を感じている人は、特に自身の内的状態を基に他者について推論しやすいがために、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすいことが予測される。

本研究の目的と仮説

以上の議論より、本研究では、「貧しい人ほど寄付をする」という現象について残されている謎、すなわち、「なぜ貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という謎を解明するため、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討する。金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めるのであれば、この謎の解明に一步近づくであろう。なぜならば、「貧しい人は他者の苦境を金銭の少なさに帰属させやすいために、他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出す」という解釈が可能となるためである。

その際、金銭的欠乏感の「因果的影響」を明らかにするため、金銭的欠乏感を実験的に操作する。よって仮説は、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、他者の苦境を金銭の少なさに帰属させやすいだろう、というものである。

実験 1

方法

実験参加者

144名（女性90名、男性54名）の大学生が実験に参加した。平均年齢は19.7歳（ $SD=0.9$ ）であった。

実験計画

1要因2水準（金銭的欠乏感：高／低）の参加者間計画であった。参加者は金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てられた。

手続き

大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った。次に、「想像に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属を測定する質問等を行った。最後に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、調査に関する感想を尋ねる質問等を行った。全員の回答が終わった後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

金銭的欠乏感の操作

豊沢・竹橋（2015, 2016）および Toyosawa & Takehashi（2016）で用いられていた方法で操作した。参加者はまず、鈴木さんというアルバイトで生計を立てている一人暮らしの大学生についての文章を読んだ。金銭的欠乏感高条件では、鈴木さんはお金に余裕がなく、3日間で1,000円しか食費に使えないと記述されていた。金銭的欠乏感低条件では、鈴木さんはお金に余裕があり、3日間で食費に10,000円使えると記述されていた。実際に用いた文章は以下の通りである。なお、ゴシック体太字の箇所〔 〕外が金銭的欠乏感高条件で用いたもの、〔 〕内が金銭的欠乏感低条件で用いたものである。

鈴木さんは、大学1年生です。この春、実家から遠く離れた大学に進学し、一人暮らしを始めました。学費と家賃以外の仕送りはなく、アルバイトをして生計を立てています。さて、次の給料日まであと3日となりました。**今月は余裕がなく、3日間で食費に1,000円しか使うことができません** [今月は余裕があり、3日間で食費に10,000円も使うことができます]。

この文章を読んだ後、参加者は、もし自分が鈴木さんの状況に置かれたら、このお金をどのように使うかを尋ねられ、3日間の食費計画を表に記入した。実際に用いたものを表1に示す。なお、記入の時間としてまず4分間設け、4分間経過後、終わった人には次の「想像に関する調査」（他者の苦境に対する原因帰属を測定する部分）へ進むよう指示した。終わっていない人には、引き続き食費計画の記入を続け、終わり次第、次へ進むよう指示した。

表1 実験1において金銭的欠乏感の操作で用いられた表

		食事の内容 例) パン, 学食	予算
1日目 (月)	朝		円
	昼		円
	夜		円
2日目 (火)	朝		円
	昼		円
	夜		円
3日目 (水)	朝		円
	昼		円
	夜		円
合計 (1,000円以内)			円

注) 金銭的欠乏感低条件では、太字下線部分が10,000円となっていた。

他者の苦境に対する原因帰属の測定

参加者はまず、友人と旅行に行くことを約束していたが、それが難しくなったため、約束をなしにしてもらおうとしている大学生についての記述を読んだ。実際に用いた文章は以下の通りである。

Aさんは、都内の大学生です。ある日、別の大学に通う高校時代の友人と、2人で旅行に行く約束をしました。行き先や、具体的にどんなことをするかを決めていたわけではありませんが、なんとなく、「この月に2人で温泉旅行に行こうか」と話していました。しかし、旅行の時期が近づくにつれ、Aさんは、旅行に行くことが難しいことに気が付き始めました。Aさんは、旅行に行く約束を、いったんなしにしてもらい、余裕ができればまた声をかけることにしようと考えています。

続いて、Aさんが旅行に行くことが難しい理由として、「忙しい」と「お金がない」のどちらがより重大であると思うかを尋ねた。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法(1:まったく重大でない～10:とても重大)で尋ねた。

操作チェック項目

金銭的欠乏感の操作の有効性をチェックするために、「大学生の食生活に関する調査」(金銭的欠乏感を操作する部分)において描かれた状況に対して、どのくらい金銭的欠乏感(お金が足りないという気持ち)を感じたかを、4件法(1:まったく感じなかった～4:とても感じた)で尋ねた。

結果

操作チェック

金銭的欠乏感について、条件を独立変数とした t 検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M=3.57, SE=0.08$)金銭的欠乏感低条件より($M=1.86, SE=0.09$)、金銭的欠乏を強く感じていた($t(141)=14.70, p<.001, d=2.45$)。よって、操作は有効であったと考えられる。

仮説の検証

まず、Aさんが旅行に行くことが難しい理由として「忙しい」と「お金がない」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、 χ^2 検定を行った(表2)。その結果、「お金がない」を選択した割合は金銭的欠乏感低条件(52.1%)より金銭的欠乏感高条件(68.5%)において高かった($\chi^2(1) = 4.04, p = .044, V = .167$)。この結果は仮説を支持するものであった。

表2 条件および選択肢ごとの参加者の人数

	忙しい	お金がない	合計
金銭的欠乏感高条件	23	50	73
金銭的欠乏感低条件	34	37	71
合計	57	87	144

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件(金銭的欠乏感高/金銭的欠乏感低)×理由の種類(忙しい/お金がない)の2要因混合計画の分散分析を行った(図1)。その結果、条件と理由の種類の主効果は有意でなかったが($F(1, 141) < 2.42, p > .122, \eta_p^2 < .017$)、交互作用が有意に近かった($F(1, 141) = 3.73, p = .055, \eta_p^2 = .026$)。単純主効果検定の結果、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 7.86, SE = 0.28$)金銭的欠乏感低条件より($M = 7.16, SE = 0.28$)、「お金がない」という理由をより重大であると評定しており、この差は有意に近かった($F(1, 141) = 3.18, p = .077, \eta_p^2 = .022$)。この結果は仮説を支持するものであった。「忙しい」については、金銭的欠乏感高条件の方が($M = 6.95, SE = 0.23$)金銭的欠乏感低条件より($M = 7.26, SE = 0.24$)重大でないとして評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった($F(1, 141) = 0.89, p = .348, \eta_p^2 = .006$)。

考察

実験1の結果、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、架空の大学生が旅行に行くことが難しい主要な理由として、「忙しい」より「お金がない」を選択する割合が有意に高いことが示された。また、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、「お金がない」という理由をより重大であ

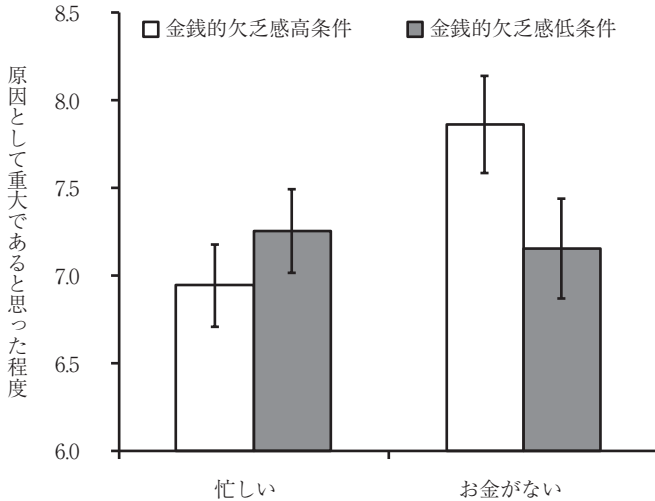


図1 条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度
注) 得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

ると評定しており、この差は有意に近いことが示された。これらの結果は、本研究の仮説を支持するものであり、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを示すものであった。

ただし、このような結果が得られたのは、推論対象である他者が参加者と同じ大学生であったためである可能性が考えられる。Ahn, Oettingen, & Gollwitzer (2017) は、社会的推論における投影は、推論対象である他者と自己の類似性が高い場合のみに生じることを指摘している。そのため、大学生以外が推論対象の場合は、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めない可能性がある。しかし石井・竹澤 (2017) では、推論対象である他者と自己の類似性に関わらず、人は他者について推論する際に投影を用いやすいことが示されている。また、他者の目標推論を扱った Dunlop, McCoy, Harake, & Gray (2018) においても、他者との類似性が投影を調整する効果は見られなかったと報告されている。つまり、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めるのは、その「他者」が自己に類似している場合に限られるのかどうかは明らかではない。そこで実験2では、推論対象が大学生以外の場合においても、金銭的欠乏感

が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めるかどうかを検討する。

実験2

方法

実験参加者

157名（女性80名、男性77名）の大学生が実験に参加した。平均年齢は19.4歳（ $SD=1.6$ ）であった。

実験計画

1要因2水準（金銭的欠乏感：高／低）の参加者間計画であった。参加者は金銭的欠乏感高条件あるいは金銭的欠乏感低条件にランダムに割り当てられた。

手続き

大学の講義時間内に1冊の質問紙を各参加者に配布することで実験を実施した。参加者にはカバー・ストーリーとして、2つの無関連な予備調査に協力してほしいと説明した。そしてまず、実験1と同様に、「大学生の食生活に関する調査」と称した部分で、金銭的欠乏感の操作を行った。次に、「児童養護施設問題に関する調査」と称した部分で、他者の苦境に対する原因帰属を測定した（詳細は後述）。最後に、実験1と同様に、2つの調査全体に関わる質問と称した部分で、金銭的欠乏感の操作チェックのための質問や、調査に関する感想を尋ねる質問等を行った。全員の回答が終わった後、デブリーフィングを行い、実験を終了した。

他者の苦境に対する原因帰属の測定

参加者はまず、運営が厳しくなっている、ある児童養護施設についての記述を読んだ。実際に用いた文章は以下の通りである。

この児童養護施設は、親から虐待されたり親が亡くなったりし

て、他の親戚もいない子どもたちが暮らす施設です。子どもたちはこの施設以外に帰る場所はなく、毎日の生活をこの施設で送っています。この施設はNPOの活動の一環で運営されています。施設の管理や子どもの生活のサポートを行うボランティア、人々からの寄付によって、この施設の運営はまわっています。しかし最近、人手が足りなくなったり、活動資金が不足したりして、施設の運営が厳しくなっています。もし児童養護施設が閉鎖されれば、子どもたちの行き場はなくなってしまいます。

続いて、この児童養護施設の運営が厳しい理由として、「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると思うかを尋ねた。また、各理由がどの程度重大であるかを、それぞれ10件法（1:まったく重大でない～10:とても重大）で尋ねた。

結果

操作チェック

金銭的欠乏感について、条件を独立変数とした t 検定を行った。その結果、金銭的欠乏感高条件の方が（ $M=3.53$, $SE=0.09$ ）金銭的欠乏感低条件より（ $M=2.00$, $SE=0.11$ ）、金銭的欠乏を強く感じていた（ $t(155)=10.98$, $p<.001$, $d=1.74$ ）。よって、操作は有効であったと考えられる。

仮説の検証

まず、児童養護施設の運営が厳しい理由として「人手不足」と「資金不足」のどちらがより重大であると選択するかと条件の関連性を検討するために、 χ^2 検定を行った（表3）。その結果、有意な関連は見られなかった（ $\chi^2(1)=0.94$, $p=.331$, $V=.078$ ）。しかし、「資金不足」を選択する割合は、金銭的欠乏感低条件（65.4%）より金銭的欠乏感高条件（57.9%）において高かった。つまり、有意差はなかったものの、仮説と一致するパターンの結果が得られた。

表3 条件および選択肢ごとの参加者の人数

	人手不足	資金不足	合計
金銭的欠乏感高条件	28	53	81
金銭的欠乏感低条件	32	44	76
合計	60	97	157

次に、各理由が原因としてどの程度重大であるかについて、条件（金銭的欠乏感高／金銭的欠乏感低）×理由の種類（人手不足／資金不足）の2要因混合計画の分散分析を行った（図2）。その結果、条件の主効果が非有意（ $F(1, 155) = 2.06, p = .153, \eta_p^2 = .013$ ）、理由の種類の主効果が有意であり、資金不足の方が（ $M = 8.63, SE = 0.11$ ）人手不足より（ $M = 7.86, SE = 0.13$ ）重大であると評定されていた（ $F(1, 155) = 17.75, p < .001, \eta_p^2 = .103$ ）。より重要なことに、交互作用が有意に近かった（ $F(1, 155) = 3.87, p = .051, \eta_p^2 = .024$ ）。単純主効果検定の結果、金銭的欠乏感高条件の方が（ $M = 8.93, SE = 0.16$ ）金銭的欠乏感低条件より（ $M = 8.33, SE = 0.16$ ）、「資金不足」という理由をより重大であると評定していた（ $F(1, 155) = 6.85, p = .010, \eta_p^2 = .042$ ）。この結果は仮説を支持するものであった。「人手不足」については、金銭的欠乏感高条件の方が（ $M = 7.80, SE = 0.18$ ）金銭的欠乏感低条件より（ $M = 7.92, SE = 0.19$ ）重大でないと評定する傾向が見られたが、その差は有意ではなかった（ $F(1, 155) = 0.20, p = .653, \eta_p^2 = .001$ ）。

考察

実験2の結果、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、児童養護施設の運営難の原因としての「資金不足」の重要性を、有意に高く評定することが示された。主要な理由として「資金不足」を選択する割合については、条件間で有意な差は見られなかったが、パターンとしては、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が高い割合で「資金不足」を選択していた。有意差が見られなかった原因は、金銭的欠乏感低条件においても、「資金不足」を選択する割合が高かったためであると考えられる。これらの結果は、概ね本研究の仮説を支持するものであり、金銭的欠乏感が高い場合には、他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすいことを示すものであった。

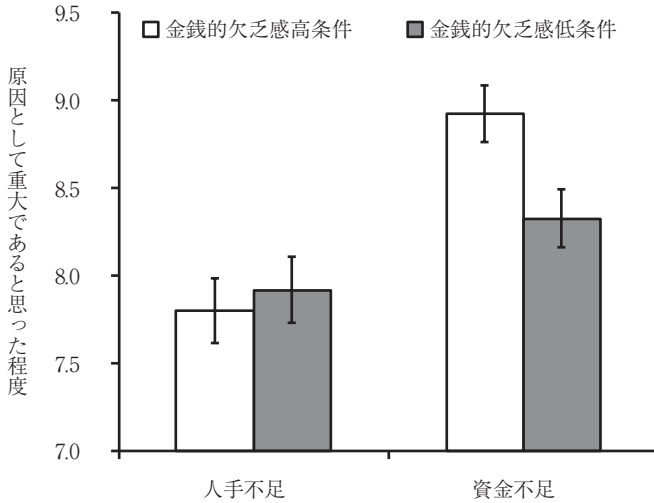


図2 条件および理由の種類ごとの、原因として重大であると評定した程度
 (注) 得点範囲は1～10である。エラーバーは標準誤差を示す。

また、実験2には、大学生以外が推論対象の場合でも、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めるかどうかを検討するという目的もあった。投影は推論対象である他者と自己の類似性が高い場合にのみ生じることを指摘する研究もあったためである (Ahn et al., 2017)。結果は、参加者と同じ大学生以外を推論対象とした場合でも、金銭的欠乏感が他者の苦境を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを示していた。この結果は、自己と必ずしも類似していない他者について推論する場合でも、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを示唆している。

総合考察

本研究の目的は、金銭的欠乏感が他者の苦境に対する原因帰属に及ぼす影響を検討することであった。実験1では、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、架空の大学生が旅行に行くことが難しい原因をお金がないことに帰属させやすいことが示された。

実験2では、金銭的欠乏感を高められた条件の参加者の方が、高められなかった条件の参加者より、児童養護施設の運営が厳しい原因を資金不足に帰属させやすいことが示された。これらの結果は、金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを示している。

本研究の意義

近年の心理学研究は、「貧しい人ほど寄付をする」という直感に反する現象に、貧しい人の利他性の高さが関連していることを示唆していた。すなわち、貧しさに伴う主観的社会経済的地位の低さが、苦境にいる他者に対する利他的動機づけを高めやすくすることが示されていた (e.g., Stellar, Manzo, Kraus, & Keltner, 2012)。しかし、合理的な観点から考えれば、利他的動機づけが高まったとしても、貧しい人は金銭的援助でなく、その他の援助 (e.g., 時間的援助としてのボランティア) を行うべきであろう。そのため、利他性という観点からの説明では「なぜ貧しい人は他者を助ける際に、わざわざ自身に不足しているお金を差し出すのか」という、より本質的な謎が残っていた。この謎を解明するため、本研究では、主観的社会経済的地位の低さとは似て非なる貧しさの側面、すなわち金銭的欠乏感に着目し、これが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることを示した。この知見を基にすると、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすいためである可能性が考えられる。このように、「貧しい人ほど寄付をする」という現象について残る謎の解明を一步進めた点に、本研究の意義がある。

また、本研究で示された結果は、欠乏感に関する研究の知見を拡大するものである。欠乏感に関する従来の研究の多くは、欠乏感が個人の課題遂行に及ぼす影響を検討してきた (for a review, Mullainathan & Shafir, 2013)。それに対し、本研究で示された結果は、欠乏感が対人・社会的認知にも影響を及ぼすことを示している。このように、先行研究の枠組みを越えて、欠乏感が人の心に及ぼす影響の広範性を示したという点においても、本研究には一定の意義があるであろう。

限界点と今後の展望

本研究の限界点の1つは、寄付行動を扱っていないことである。本研究の知見より、貧しい人が他者を助ける際にわざわざ自身に不足しているお金を差し出すのは、彼らが他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させやすいためである可能性が示唆された。しかし本研究では、金銭的欠乏感が実際に寄付行動を促進するかどうかまでは検討されていない。金銭的欠乏感は「お金を自分自身のために保持しておきたい」という欲求も高めることが考えられ、この欲求は寄付行動を抑制することが考えられる。すなわち、金銭的欠乏感とは他者の苦境を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めることで寄付行動を促進する可能性と、金銭保持欲求を上昇させることで寄付行動を抑制する可能性の両方が考えられる。そのため、今後の研究では、どのような条件下で金銭的欠乏感が寄付行動を促進するのかを明らかにし、本研究で提案された「金銭的欠乏感」という新たな視点によって、「貧しい人ほど寄付をする」という現象の謎の解明が本当に進みうるのかどうかを検討することが望まれる。

もう1つの限界点は、金銭的欠乏感の操作として単一の方法しか用いていないことである。単一の操作方法に頼った実験では、予期していなかった影響が生じ、それが偶然に仮説と一致する結果を生み出す可能性がある。例えば、本研究で示された結果は、金銭的欠乏感高条件において金銭的欠乏感が高まったためではなく、金銭的欠乏感低条件において「人」についてより考えていたためであることが考えられる。金銭的欠乏感高条件では、3日間で1,000円しか使えないため、自宅で1人で食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。それに対し金銭的欠乏感低条件では、3日間で10,000円も使えるため、他者と一緒に食事することを考えた参加者が多かったかもしれない。このように、金銭的欠乏感低条件では「人」について考える機会が多かったために、後の課題で他者の苦境の原因を人手不足に帰属させやすかった可能性がある。こうした可能性を排除するためにも、今後の研究では、本研究とは異なる操作方法を用いた場合においても同様の結果が得られるかどうかを確認することが求められる。

引用文献

- Aarts, H., Dijksterhuis, A., & Vries, P. (2001). On the psychology of drinking: Being thirsty and perceptually ready. *British Journal of Psychology*, **92** (4), 631-642.
- Ahn, J. N., Oettingen, G., & Gollwitzer, P. M. (2017). Projection of Visceral Needs. *Social Psychology*, **48**, 54-59.
- Ariely, D., & Wertenbroch, K. (2002). Procrastination, deadlines, and performance: Self-control by precommitment. *Psychological Science*, **13** (3), 219-224.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117** (3), 497-529.
- Carrasco, M., Ling, S., & Read, S. (2004). Attention alters appearance. *Nature Neuroscience*, **7** (3), 308-313.
- Dunlop, W. L., McCoy, T. P., Harake, N., & Gray, J. (2018). When I think of you I project myself: Examining idiographic goals from the perspective of self and other. *Social Psychological and Personality Science*, **9** (5), 586-594.
- Epley, N., Keysar, B., Van Boven, L., & Gilovich, T. (2004). Perspective taking as egocentric anchoring and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87** (3), 327-339.
- Greve, F. (2009, May 23). America's poor are its most generous donors. *The Seattle Times*. (<http://www.seattletimes.com/nation-world/americas-poor-are-its-most-generous-donors/>)
- Iannaccone, L. R. (1988). A formal model of church and sect. *American Journal of Sociology*, **94**, S241-S268.
- Independent Sector (2002). *Giving and volunteering in the United States, 2001 survey*. Washington: Independent Sector.
- 石井辰典・竹澤正哲 (2017). 心的状態の推測方略：投影とステレオタイプ化. *社会心理学研究*, **32** (3), 187-199.
- James III, R. N., & Sharpe, D. L. (2007). The nature and causes of the U-shaped charitable giving profile. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, **36** (2), 218-238.
- Johnston, D. C. (2005, December 19). Study shows the superrich are not the most generous. *The New York Times*. (<http://www.nytimes.com/2005/12/19/us/study-shows-the-superrich-are-not-the-most-generous.html>)
- Keys, A., Brožek, J., Henschel, A., Mickelsen, O., & Taylor, H. L. (1950). *The biology of human starvation*. Oxford: University of Minnesota Press.
- Kraus, M. W., Piff, P. K., & Keltner, D. (2011). Social class as culture: The convergence of resources and rank in the social realm. *Current Directions in Psychological Science*, **20** (4), 246-250.
- Kraus, M. W., Piff, P. K., Mendoza-Denton, R., Rheinschmidt, M. L., & Keltner, D. (2012). Social class, solipsism, and contextualism: How the rich are different from

- the poor. *Psychological Review*, **119** (3), 546-572.
- Kraus, M. W., Tan, J. J. X., & Tannenbaum, M. B. (2013). The social ladder: A rank-based perspective on social class. *Psychological Inquiry*, **24** (2), 81-96.
- Mani, A., Mullainathan, S., Shafir, E., & Zhao, J. (2013). Poverty impedes cognitive function. *Science*, **341** (6149), 976-980.
- Mullainathan, S., & Shafir, E. (2013). *Scarcity: Why having too little means so much*. Times Books. (ムッライナタン S.・シャフィール E. 大田直子 (訳) (2015). いつも「時間がない」あなたに－欠乏の行動経済学 早川書房)
- Putnam, R. D. (2001). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon and Schuster. (パットナム R. D. 柴内康文 (訳) (2006). 孤独なボーリング－米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房)
- Radel, R., & Clément-Guillotin, C. (2012). Evidence of motivational influences in early visual perception: Hunger modulates conscious access. *Psychological Science*, **23** (3), 232-234.
- Risen, J. L., & Critcher, C. R. (2011). Visceral fit: While in a visceral state, associated states of the world seem more likely. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100** (5), 777-793.
- Saugstad, P., & Schioldborg, P. (1966). Value and size perception. *Scandinavian Journal of Psychology*, **7** (1), 102-114.
- Shah, A. K., Mullainathan, S., & Shafir, E. (2012). Some consequences of having too little. *Science*, **338** (6107), 682-685.
- Stellar, J. E., Manzo, V. M., Kraus, M. W., & Keltner, D. (2012). Class and compassion: Socioeconomic factors predict responses to suffering. *Emotion*, **12** (3), 449-459.
- 豊沢純子・竹橋洋毅 (2015). 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響. 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 45.
- Toyosawa, J. & Takehashi, H. (2016). *Poor mindset and preference to discount foods: A life history theory approach*. The 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA.
- 豊沢純子・竹橋洋毅 (2016). 生活史と貧困プライミングが割引品の購入意図に与える影響 (2). 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集, 154.
- Van Boven, L., & Loewenstein, G. (2003). Social projection of transient drive states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29** (9), 1159-1168.
- Wiepking, P. (2007). The philanthropic poor: In search of explanations for the relative generosity of lower income households. *VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, **18** (4), 339-358.